

## 第2項 石積みの技法と特徴

天守台外周の石垣では、隅角部が算木積み、築石部が乱積みで構築されている。特に隅角部では規模の大きな花崗岩の割石を選択的に用いており、控え長さの長い石材を交互に用いた、精巧な算木積みである。矢穴の形状を見ると、縦10cm、横10cm程度の比較的大きな矢穴が認められる。石垣の最上部は玉藻廊の建築に伴う改変が見られるものの、最上部以下では矢穴の形状・サイズに大きな変化はない。また、隅角部石材の主に大面では、自然面を一部に残しながらも、ノミ調整による平滑化が明瞭に見られる石材も多い。一方で、築石部に割石はあまり見られず、花崗岩を主体とし、安山岩・凝灰岩の野面石を用いている。天端付近の勾配をみると、天端石から3石ほどで勾配がきつくなり、やや直立気味に弧を描いている。また、発掘調査で根石の下部を確認したが、胴木は確認されなかった。敷石層も確認できず、地業の痕跡は何も認められなかった。根石は基盤層である砂地の上に直接設置されていた。

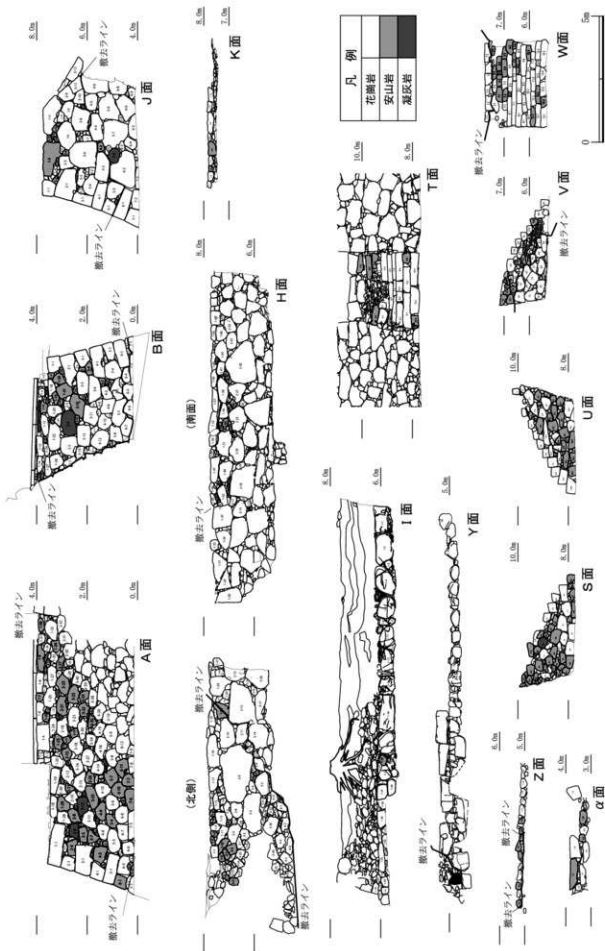
天守地下1階では、外周に比べてやや小振りな石材を多用しており、また安山岩の使用比率が高くなっている。入隅部分では、隣接する石垣の石材がそれぞれ石垣の内側へ入り込んでおり、構築順序が局所的に解明できる部分も存在する。総体的にみると、各面の構築順序は段によって異なっていることから、石垣面ごとの構築ではなく、1段ごとに複数箇所まで石積みを行っていたことがわかる。勾配は外周石垣よりもきつく、概ね80度強である。

天守台前面でも石積みの技法はほぼ天守台外周と変わらない。ただし、H面では北側で大きな花崗岩が鏡石として使われている。天守へ上る階段は上下段ともに野面石の乱積みで、安山岩の使用比率が高い。下段石垣の北面であるV面では中央部に目地が見られる。目地より上部は小振りの石を用いているが、下部は方形の大振りな石を築石として用い、間詰石に小さな石を使用している。このことから、上段は少なくとも1回の改修が行われたと考えられる。

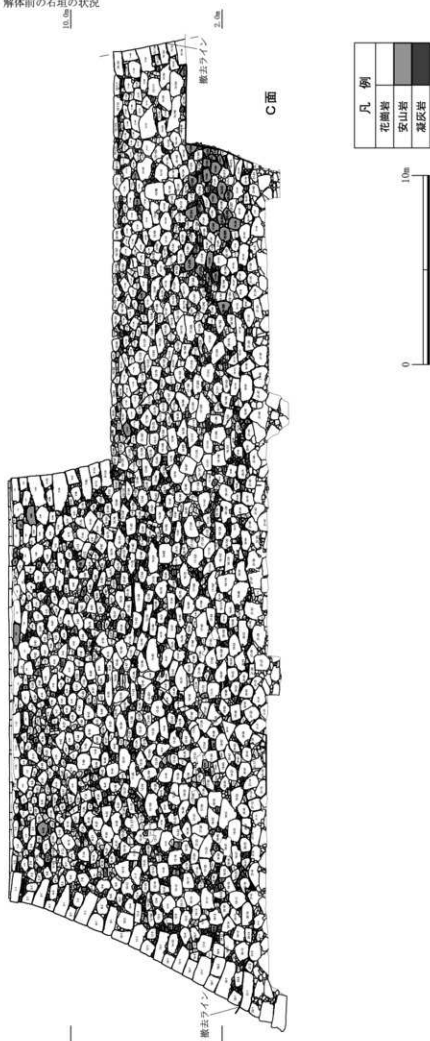
本丸虎口ではA・B面共に隅角部は割石の算木積みで、築石部は野面石の乱積みである。特徴は天守台外周の石垣と異なる所がない。

## 第3項 石垣の破損状況

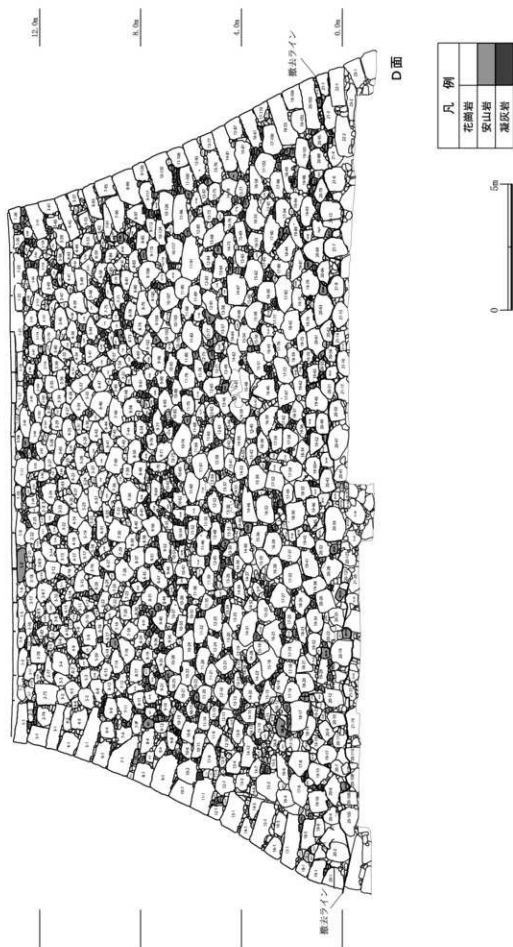
天守台石垣の破損状況は、まず平成16年度に実施した史跡高松城跡石垣基礎調査において各面ごとに確認された（高松市教育委員会2008『史跡高松城跡整備報告書第2冊 石垣基礎調査報告書』）。その後、石垣解体の直前に、文化財専門員による目視によって最終的な詳細調査を行った。確認した破損状況について第3-39～43図に示した。破損状況をまとめると、天守台を構成する主要かつ長大な石垣であるC面（北面）、D面（東面）、E面（南面）の破損状況が大きいことが分かる。C面では石垣下部を中心に間詰めやヌケ、石材のワレ、ハラミなどの変形が認められる。特に左側、中央部、東端の3箇所大きくハラミが見られるほか、左隅角部ではワレやズレが見られる。また、海面近く石材を中心にワレも目立つ。東側のハラミの上部では、ハラミに伴う石材の後退が確認できる。D面では中央から左側の下部にハラミが大きく見られる他、左隅角部では約30cm程度のズレが見られた。このズレは今回確認した中で最も大きな破損で、



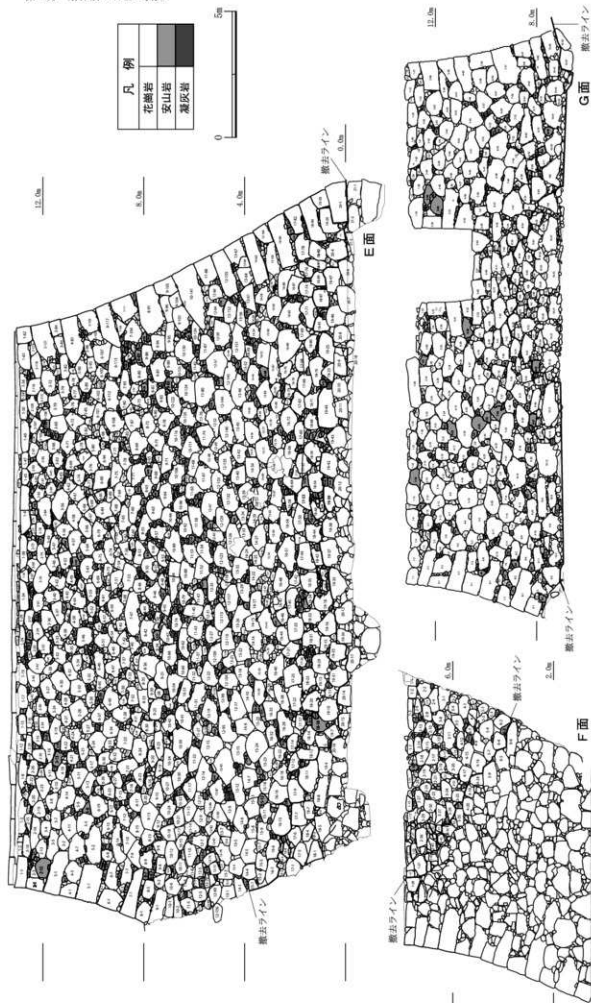
第3-24図 天守台石垣A面・B面・H面・I面・J面・K面・S面・T面・U面・V面・W面・Y面・Z面・α面石種別図 (1/150)



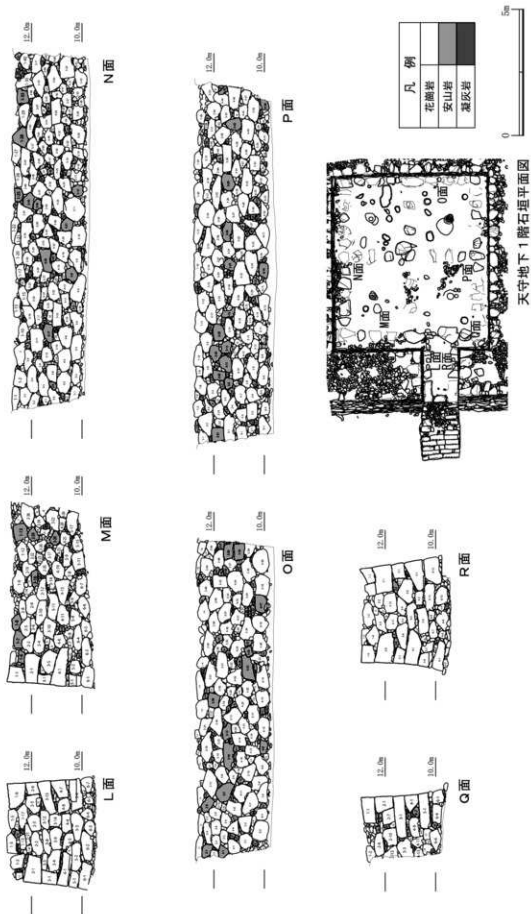
第3-25図 天守台石垣C面石種別図 (1/200)



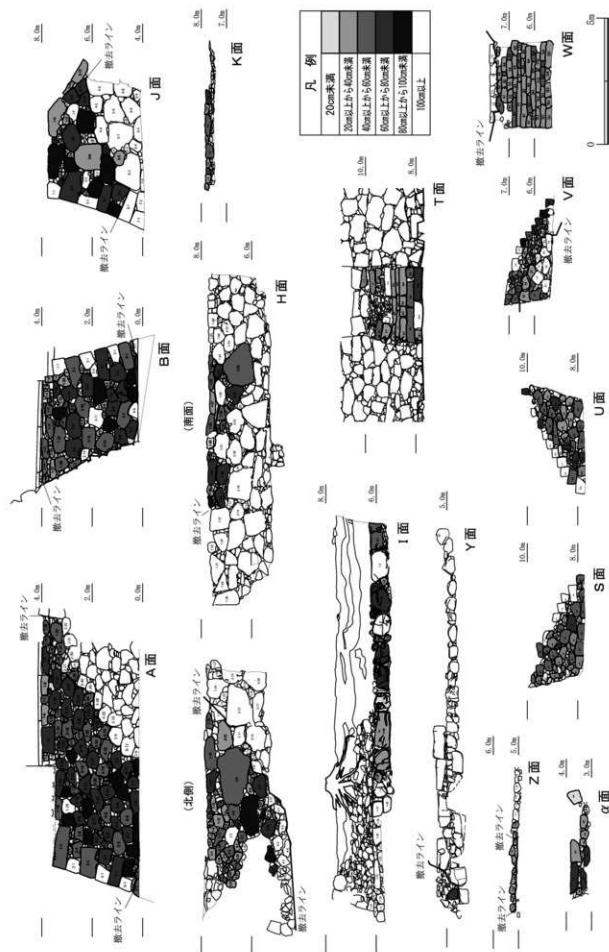
第3-26図 天守台石垣D面石種別図 (1/150)



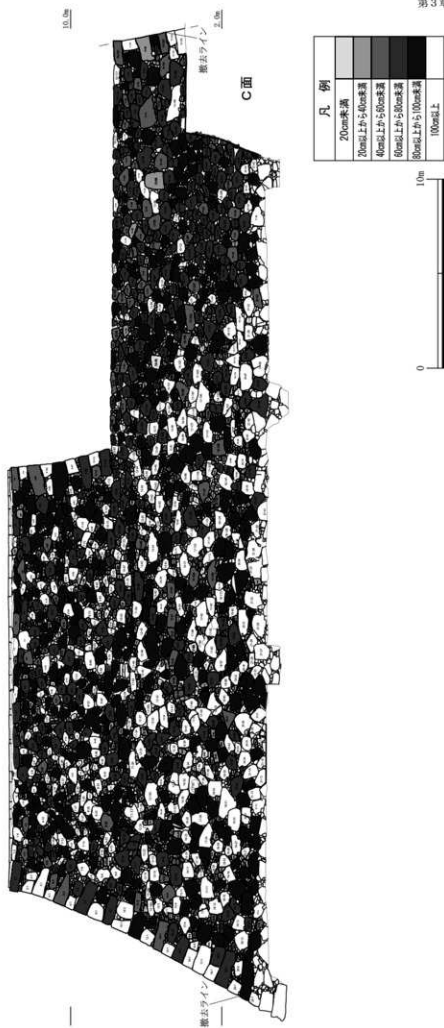
第3-27図 天守台石垣E面・F面・G面石種別図(1/150)



第3-28図 天守地下1階石垣各面石種別図 (1/150)

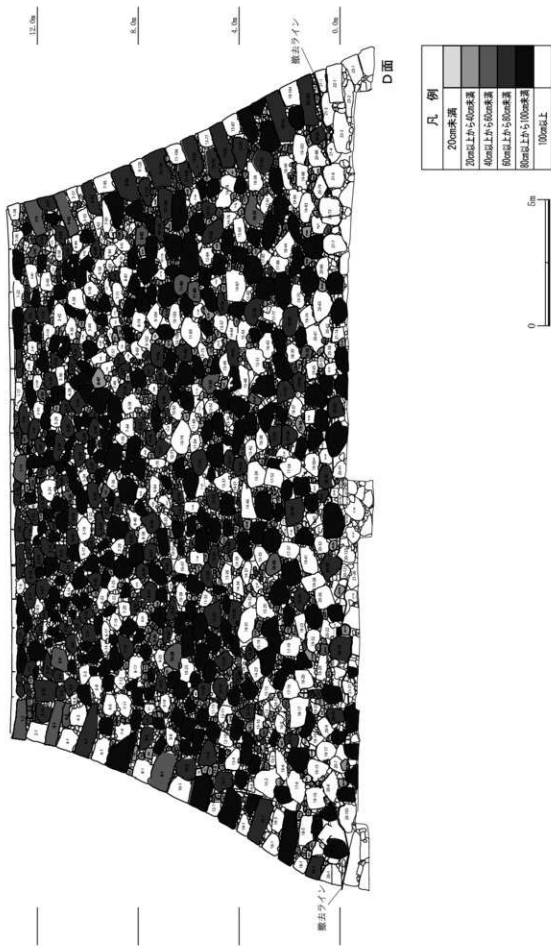


第3-29図 天守台石垣A面・B面・H面・I面・J面・K面・S面・T面・U面・V面・W面・Y面・Z面・alpha面石材控長区分図 (1/150)



第3-30 図 天守台石垣C面石材控長区分図 (1/200)





第3-31図 天守台石垣D面石材控長区分図 (1/150)